

氏名	新免光比呂
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博乙第2904号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	キリスト教・ファシズム・社会主義を「民族」とともに生きる ールーマニア知識人と民衆の歴史的实践と「農村世界」ー

主査	筑波大学	教授	文学博士	山中 弘
副査	筑波大学	教授	Ph.D.	木村 武史
副査	筑波大学	教授	博士（宗教学）	津城寛文
副査	学習院女子大学	教授	博士（学術）	中島 崇文

#### 論文の要旨

本論文は、ルーマニアにおける知識人と民衆が、キリスト教、ファシズム、社会主義などのイデオロギー、諸実践からなる社会運動体を主体的に、あるいは客体的にどのように経験してきたかをフィールドワークにもとづいて明らかにしている。論文構成は6部、10章からなっている。

第1部「概観」は導入の部分である。第1章「地域」では、バルカンにおける地域性と歴史性を生み出してきた諸帝国文明、それら帝国解体後の近代化の衝撃と多民族共住などに続いて、自然と地勢、住民、歴史と宗教におけるバルカンとのつながり、伝統的な生活と近代化、調査村の状況などルーマニアの個別的条件を示している。第2章「概念」では、本論考で使用されている民族、宗教、社会主義、共産主義、知識人、民衆などの諸概念について論じながら本論考への導入的な考察を行っている。

第2部「集団改宗による西欧化と民族の覚醒」は、文献からルーマニアにおける宗派对立の歴史的起源、その結果としての西欧化と民族意識との関係を考察している。第3章「ギリシア・カトリックの歴史的役割」では、ルーマニアにおける西欧化現象としてのギリシア・カトリック教会成立の意義が信者の二重アイデンティティという観点から具体的に論じられている。

第3部「西欧的近代国民国家の成立と民族自画像の探求」では、19世紀におけるルーマニア国民国家成立前後からのフォークロア研究、そして民族自画像探求の頂点としての民間伝承詩「ミオリツァ（雌の子羊）」研究の意義が検討されている。第4章「ルーマニア近代における民族表象と民俗研究」では、ルーマニア知識人による民族表象（民族自画像）について考察するために、19世紀以来のルーマニア民族表象を概観し、知識人の研究対象となった農村における葬送儀礼などの民俗的慣習とその意義を考察している。第5章「民族自画像の探求としてのミオリツァ研究」では、近代にはじまる民間伝承詩「ミオリツァ」研究が、現代までルーマニア知識人の重要な知的探求の課題となってきたことを論じてい

る。著者によれば、こうした探求は、ルーマニア民族をめぐる思想的、政治的な動機に基づくものであったとされる。

第4部「戦間期ファシズム運動と知識人にとっての西欧と民族」では、西欧化とその影響で共同体の解体が進む戦間期ルーマニア社会のなかで、レジオナル運動を通して民族の再生をはかろうとした知識人の姿が描かれている。第6章「レジオナル運動とルーマニア社会、知識人」は、20世紀初頭の政治社会状況と、そこに生まれたレジオナル運動と指導者の特徴、および知識人の動向を主題としている。その幻視体験がレジオナル運動を生み出すと同時に運動に宗教的性格を与えたコドレアヌに続いて、若き知識人たちに影響を与えたナエ・ヨネスクとミルチャ・エリアーデについて考察されている。第7章「ルーマニア知識人の課題とレジオナル運動」では、知識人たちがレジオナル運動に参集した理由として、運動における死の賛美と「ミオリツァ」研究における運命論との共通性とルーマニアの「歴史の欠如」について述べている。著者によれば、自己犠牲としての死と指導者への絶対的な忠誠は、「ミオリツァ」研究のなかで運命論と死への受動性が強調されたことと同義であったとされ、ミルチャ・エリアーデやエミール・シオランなどはルーマニアにおける「歴史の欠如」と対決していたことが指摘されている。

第5部「社会主義の変容における知識人と民衆」では、民族表象が活用された政治的リアリズムと権力闘争の過程で、政治的動向に沿う形で民族表象を利用した知識人と、そのイデオロギー操作の対象となった民衆による主体的実践についての考察が行われる。第8章「権力生成プロセスにおける民族表象の活用」では、国際主義と普遍主義を原則とする社会主義国家において、民族表象が国際関係と国内の権力闘争と関わりながら政治、社会、教育などの諸領域で強い影響力をもつようになり、体制そのものが知識人たちを巻き込みながら民族主義化していった過程が取り扱われている。第9章「社会主義イデオロギーの破綻」では、社会主義体制が、民族主義イデオロギーを通して民衆の生活実践を支配している宗教的感情、慣習的心性をとりこもうとしたが、民衆は、計画経済におけるノルマ達成のための数字あわせを逆手にとり、日常的サボタージュを通じて無意識に抵抗の拠点を形成し、体制を揺るがしたことが考察されている。

第6部「社会主義から資本主義への民衆の適応戦略」では、ポスト社会主義期の農村における宗派対立と民衆の社会的、宗教的实践、および現代ルーマニア社会における宗教と呪術の实践が論じられている。第10章「ポスト社会主義期の農村世界と西欧化」では、ポスト社会主義期の農村における宗派対立の事例を通して、ギリシア・カトリック聖職者、知識人など社会的エリートと一般信徒が経験した宗教的帰属の変化と彼らの宗教的実践の関わりが、政治経済体制の転換、伝統的な農村における司祭と農民の関係性、経済的苦境における農民の主体的実践という観点から意義づけられている。続いて民主革命以後のキリスト教と民衆との結びつき的一端を、現代の悪魔祓い事件から考察を行っている。

結論の部分では、キリスト教、ナショナリズム、社会主義といった社会運動体との関わりの中で、ルーマニアの歴史を通して知識人と民衆をとらえてきた西欧化と民族意識の意義について考察している。

## 審査の要旨

### 1 批評

著者は、本論文において、およそ18世後半から大戦期間を経てチャウシェスク社会主義政権期の終焉までの長い歴史過程を対象として、民族表象の形成と創造、それを積極的に担う知識人や聖職者、そしてそのまなごしの先にある「民衆」表象（フォークロア研究など）と彼らの村落での実際の生活の様子を、数多くの文献と長期のフィールドワークの成果に基づいて丹念に記述、分析しており、著者の長いルーマニア研究

の集大成に相応しい論攷になっている。第1部で、論文の中で頻出する「民族」、「宗教」、「社会主義」などの概念の整理がなされ、その後続く2部から6部までの論述の論点は大きく5つに分けることができる。

(1) 西欧化の始まりと民族意識の覚醒を契機となったギリシア・カトリック教会の成立、(2) 近代国民国家の成立に伴う国民文化の希求と象徴的自画像の形成、(3) 近代化の挫折と西欧化の反発にゆれた戦間期知識人たちのレジオナル運動をはじめとする右翼急進主義運動への関与、(4) 社会主義体制下での民族表象の活用と社会主義体制そのものの変質、(5) ポスト社会主義時代における西欧化と民衆の社会的、宗教的実践。そして、これら5つの論点を論じる中で、著者は、一見二項対立的にみえる動きが現実には錯綜していることを指摘している。例えば、ルーマニアの西欧化と民族主義の形成という正反対の方向性をもった動きが扱われており、ギリシア・カトリック教会の役割が検討される。この教会は、ハプスブルク家支配下において東方正教会の典礼を維持したまま教皇首位権を認めた特殊な教会である。この教会の改宗者たちは、正教徒のルーマニア人に対して西欧文化の紹介者としての優越的な自意識をもっていた。しかし、他方で、彼らはハプスブルク帝国に対してルーマニア民族としての権利を主張するという二重のアイデンティティを保持しており、それがルーマニアの民族主義的意識の形成に深く関与したことを明らかにしているのである。これらの錯綜する関係の中で、著者が最も力を注いでいるのが、論点としては(2)と(3)に相当する第3部第5章で扱われる民族伝承詩「ミオリツア」をめぐる知識人たちの動きと、第6章の大戦間期のレジオナル運動についての記述である。著者によれば、ルーマニアの知識人たちはこの伝承詩の主題である「無抵抗の死」と「悲劇性」をルーマニアの運命と重ねあわせ、そこから民族自画像を描こうとしており、さらに、「ミオリツア」の運命論は、レジオナル運動で強調された自己犠牲としての死と指導者への絶対的忠誠という点で共通していることを指摘している。そして、このレジオナル運動に関与したエリアーデの動向が詳細に論じられており、エリアーデのファシズムへの関与の状況証拠が次々に挙げられる優れた議論を展開している。著者は、エリアーデ宗教学の重要な概念である「歴史の欠如」は、ルーマニアの知識人たちが苦しんだルーマニア自身の「歴史の欠如」が投影されており、それを克服しようとした試みであったことを指摘しており、エリアーデ研究にとっても重要な問題提起となっている。以上のように本論文の成果は高く評価できるものであるが、若干の問題も残されている。著者は3世紀にわたる非常に長いスパンのルーマニアの歴史過程を、主に「知識人」、「民衆」、「農村」に焦点を合わせて論じているが、それらを扱う方法論に首尾一貫性を欠いており、詳細な一時資料に基づく歴史的記述としても、農村部のフィールドワークとしても物足りなさを感じないでもない。もとより、本論文は、知識人と民衆という視点から、キリスト教、ファシズム、社会主義を経験したルーマニアの近現代の変動の一端を見事に描いた画期的な研究であり、本論文のルーマニア研究への学問的貢献は高く評価することができる。

## 2 最終試験

平成31年1月30日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(3)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

## 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。